



昭和の高度成長期、北海道の観光みやげ民芸品といえば、アイヌ人形とヒグマの木彫りという時代が長く続いていました。そんな木彫民芸品全盛の時代、独自のデザインの民芸作品を次々創作し、阿寒湖畔の民芸品店で北海道観光ブームという時代の真ただ中を駆け抜けてきました。大雪山のふもとに新たな居を構えた今、木のぬくもりに囲まれて新たな思索を重ねています。

住宅に隣接する小さなみやげ品店

「ふくろうの店」。以前からあった古い小さな納屋を改造しました。天然木の味わいを生かした木彫クラフト作品が所狭しと並んでいます。

原木をのみ一本で削り、大胆な作風が評判を呼んだ代表作、アイヌ女性のレリーフ、さまざまなかぶくろうクラフト作品、キタキツネや森の動物たちが楽しそうに楽器を奏でている森のコンサートなど、代表的な作品の数々。店名にもなっている幸運を呼ぶふくろうは店の中心に。中でも白ふくろうの存在感は別格です。

「木と石には必ず魂がある」。木魂(こだま)が宿るから木は投げないんだよ。最後は犬のご飯を炊くための炊き付けにするんだ。

そこには「木は最後まで生かす」ということへの思いがこもっているようです。

現在、主に制作に取り組んでいるのは墨絵イラスト画の作品作り。「できるだけ電気をつけずに考えるんだ。夜中、1つのことを10回ぐらい考えるね」。



「ここにあるものはすべて生かしてやろうと思うね。そうすると物が喜ぶでしょ。そしてみんなと一緒に楽しみたいね。流木を使ったオブジェを作ったり、自分の庭に飾るクリスマスキャンドルを作ったりね。子供たちにもいつぱい来てほしい」。軒下からは4匹の蛇の頭が「ニョロリ」と顔を出してお客さまをお出迎え。蛇たちの出来栄えにはかなりご満悦です。

自作作品「樹霊観音像」が自宅居間に鎮座しています。傍らには「京都知恩院門跡、信宏」と、命名の書の掛け軸も。多くの著名人と交際してきた一端を垣間見せてくれます。

「中富良野で暮らす娘に頼まれて贈ったんだけどね、『夜な夜な泣く』というんだよ。離れるのが嫌だったのかねえ」。制作から8年、こん身を振るった観音像は今、この地に安住を得たようです。

広い敷地には、妻菅子さん自慢のバラ園も。初めての夏を前に、早くも根付いて見事に咲き誇りました。

店名の由来になったふくろうのオブジェ作品から



自宅縁の下からひょこっと顔を出している蛇たち

店の入り口ではふくろうがお出迎え

7年前に彫った「樹霊観音」像

森のオーケストラから

にしやま ただお  
西山 忠男さん/木彫作家/34区/☎82-2001

神戸市出身、74歳。服飾デザインの染沢デザイン研究所(東京)中退。1954(昭和29)年、18歳の時初めて訪れた北海道旅行で道内各地を放浪。阿寒の魅力に魅せられ、阿寒湖畔に居を構えました。23歳で阿寒湖畔に民芸品店を開業。デザイナーの卵だった若い独創的感覚で新しい民芸品を次々と生み出し大ヒット。顔が左右に動く木彫コロポックルは意匠登録もして、アイヌ女性の木彫レリーフに続くヒット作となりました。『狐運(こううん)の鈴』で北海道秀作民芸展最優秀賞(知事賞、1982年)など知事賞3回、ほかに各種民芸展で受賞多数。最盛期には阿寒町内で制作工房、みやげ物店、レストラン、喫茶店を経営。3女が札幌の大学に進学したのを契機に札幌市内に転出し、同市内で喫茶店を2店舗展開。その後再び自然に囲まれた暮らしを求めて上富良野町へ。昨年12月、東川町に転居。